

# 第 13 回 大数の法則と中心極限定理 (8)

村澤 康友

2023 年 11 月 6 日

## 今日のポイント

1. 確率変数列  $\{X_i\}$  の標本平均  $\bar{X}_n := (X_1 + \cdots + X_n)/n$  の分布を近似する.
2.  $\{X_i\}$  が平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2$  の独立かつ同一な分布をもつなら  $\{\bar{X}_n\}$  は  $\mu$  に確率収束 (大数の法則).
3.  $\{Z_i\}$  が平均 0, 分散 1 の独立かつ同一な分布をもつなら  $\{\sqrt{n}\bar{Z}_n\}$  は  $N(0, 1)$  に分布収束 (中心極限定理). したがって  $\bar{Z}_n \overset{a}{\sim} N(0, 1/n)$ .

## 目次

1	標本平均 (pp. 149, 183)	1
2	大数の法則	2
2.1	確率収束 (p. 162)	2
2.2	大数の法則 (p. 160)	2
3	中心極限定理	2
3.1	分布収束	2
3.2	総乗記号	2
3.3	中心極限定理 (p. 162)	2
3.4	正規乱数の生成 (p. 171)	3
4	今日のキーワード	4
5	次回までの準備	4
1	標本平均 (pp. 149, 183)	

$\{X_i\}$  を確率変数列とする.

定義 1.  $(X_1, \dots, X_n)$  の標本平均は

$$\bar{X}_n := \frac{X_1 + \cdots + X_n}{n}$$

注 1. 確率変数の平均 (期待値) とは異なる.

定理 1.  $X_1, \dots, X_n$  が平均  $\mu$  の同一な分布をもつなら

$$E(\bar{X}_n) = \mu$$

証明. 期待値の線形性より

$$\begin{aligned} E(\bar{X}_n) &= E\left(\frac{X_1 + \cdots + X_n}{n}\right) \\ &= \frac{E(X_1) + \cdots + E(X_n)}{n} \\ &= \frac{\mu + \cdots + \mu}{n} \\ &= \mu \end{aligned}$$

□

定理 2.  $X_1, \dots, X_n$  が分散  $\sigma^2$  の独立かつ同一な分布をもつなら

$$\text{var}(\bar{X}_n) = \frac{\sigma^2}{n}$$

証明.  $X_1, \dots, X_n$  は独立なので

$$\begin{aligned} \text{var}(\bar{X}_n) &= \text{var}\left(\frac{X_1 + \cdots + X_n}{n}\right) \\ &= \frac{\text{var}(X_1 + \cdots + X_n)}{n^2} \\ &= \frac{\text{var}(X_1) + \cdots + \text{var}(X_n)}{n^2} \\ &= \frac{\sigma^2 + \cdots + \sigma^2}{n^2} \\ &= \frac{\sigma^2}{n} \end{aligned}$$

□

## 2 大数の法則

### 2.1 確率収束 (p. 162)

$\{x_n\}$  を実数列,  $\{X_n\}$  を確率変数列とする.

**定義 2.** 任意の  $\epsilon > 0$  について, ある自然数  $N(\epsilon)$  が存在し,

$$n \geq N(\epsilon) \implies |x_n - c| < \epsilon$$

なら  $\{x_n\}$  は  $c$  に収束するという.

注 2.  $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = c$  または  $x_n \rightarrow c$  と書く.

**定義 3.** 任意の  $\epsilon > 0$  について

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \Pr[|X_n - c| < \epsilon] = 1$$

なら  $\{X_n\}$  は  $c$  に確率収束するという.

注 3.  $\text{plim}_{n \rightarrow \infty} X_n = c$  または  $X_n \xrightarrow{p} c$  と書く.

注 4. 確率変数列の収束の概念は他にもある.

### 2.2 大数の法則 (p. 160)

**定理 3** (チェビシェフの大数の弱法則).  $\{X_i\}$  が平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2$  の独立かつ同一な分布をもつなら

$$\text{plim}_{n \rightarrow \infty} \bar{X}_n = \mu$$

証明. チェビシェフの不等式より, 任意の  $\epsilon > 0$  について

$$\Pr[|\bar{X}_n - E(\bar{X}_n)| \geq \epsilon] \leq \frac{\text{var}(\bar{X}_n)}{\epsilon^2}$$

すなわち

$$\Pr[|\bar{X}_n - \mu| \geq \epsilon] \leq \frac{\sigma^2/n}{\epsilon^2}$$

余事象の確率は

$$\Pr[|\bar{X}_n - \mu| < \epsilon] > 1 - \frac{\sigma^2/n}{\epsilon^2}$$

$n \rightarrow \infty$  の極限をとると

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \Pr[|\bar{X}_n - \mu| < \epsilon] \geq 1$$

確率は 1 以下なので等号が成立.  $\square$

**例 1.** コインを 10 回, 100 回, 1000 回と投げ続けると表の出る割合は  $1/2$  に近づく (図 1).

## 3 中心極限定理

### 3.1 分布収束

$\{X_n\}$  に対応する cdf の列を  $\{F_n(\cdot)\}$  とする.

**定義 4.**  $F(\cdot)$  の任意の連続点  $x$  で

$$\lim_{n \rightarrow \infty} F_n(x) = F(x)$$

なら  $\{X_n\}$  は  $F(\cdot)$  に分布 (法則) 収束するという.

注 5.  $X_n \xrightarrow{d} F(\cdot)$  と書く.

### 3.2 総乗記号

**定義 5.**

$$\prod_{i=1}^n x_i := x_1 \cdots x_n$$

**練習 1.** 以下の公式を示しなさい.

1.  $\prod_{i=1}^n ax_i = a^n \prod_{i=1}^n x_i$
2.  $\prod_{i=1}^n a^{x_i} = a^{\sum_{i=1}^n x_i}$
3.  $\prod_{i=1}^n x_i y_i = \prod_{i=1}^n x_i \prod_{i=1}^n y_i$

### 3.3 中心極限定理 (p. 162)

**定理 4** (リンドバーグ=レヴィの中心極限定理).  $\{Z_i\}$  が平均 0, 分散 1 の独立かつ同一な分布をもつなら

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n Z_i \xrightarrow{d} N(0, 1)$$

証明.  $(1/\sqrt{n}) \sum_{i=1}^n Z_i$  の mgf が  $N(0, 1)$  の mgf に収束することを示せばよい. すなわち

$$\lim_{n \rightarrow \infty} M_{\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n Z_i}(t) = e^{t^2/2}$$

を示したい.  $Z_1, \dots, Z_n$  は独立かつ同一な分布をもつので

$$\begin{aligned} M_{\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n Z_i}(t) &:= E\left(e^{\frac{t}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n Z_i}\right) \\ &= E\left(\prod_{i=1}^n e^{\frac{t}{\sqrt{n}} Z_i}\right) \\ &= \prod_{i=1}^n E\left(e^{\frac{t}{\sqrt{n}} Z_i}\right) \\ &= M_Z\left(\frac{t}{\sqrt{n}}\right)^n \end{aligned}$$

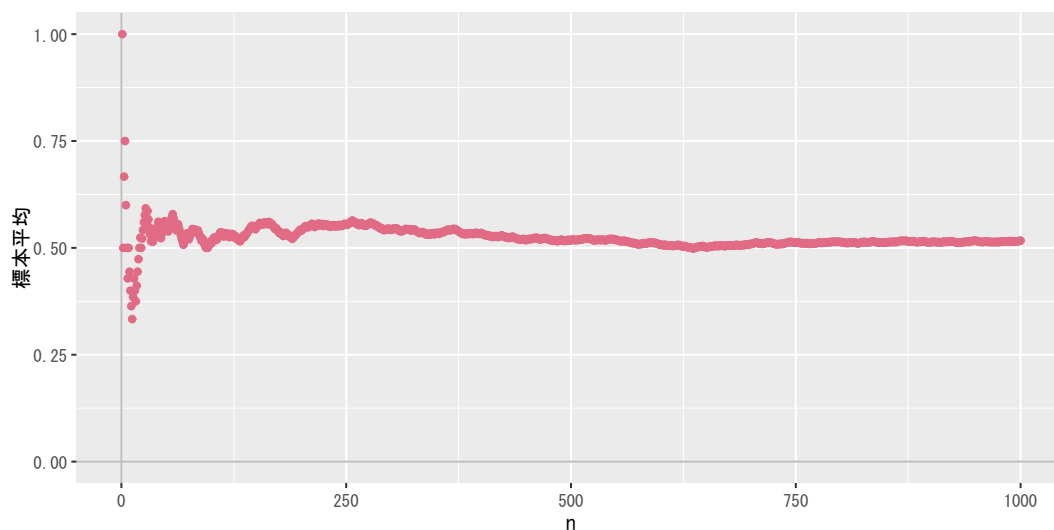


図1  $n$  回のコイントスにおける表の割合

$M'_Z(0) = 0$ ,  $M''_Z(0) = 1$  なので, マクローリン展開より

$$\begin{aligned} M_Z\left(\frac{t}{\sqrt{n}}\right) &= M_Z(0) + M'_Z(0)\frac{t}{\sqrt{n}} + \frac{M''_Z(0)}{2}\left(\frac{t}{\sqrt{n}}\right)^2 + \cdots \\ &= 1 + \frac{t^2}{2n} + \cdots \end{aligned}$$

したがって

$$\begin{aligned} \lim_{n \rightarrow \infty} M_Z\left(\frac{t}{\sqrt{n}}\right)^n &= \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{t^2}{2n} + \cdots\right)^n \\ &= e^{t^2/2} \end{aligned}$$

□

注 6. 式変形すると

$$\sqrt{n}\bar{Z}_n \xrightarrow{d} N(0, 1)$$

**系 1.**  $\{X_i\}$  が平均  $\mu$ , 分散  $\sigma^2$  の独立かつ同一な分布をもつなら

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n \frac{X_i - \mu}{\sigma} \xrightarrow{d} N(0, 1)$$

証明.  $Z_i := (X_i - \mu)/\sigma$  として前定理を適用. □

注 7. 式変形すると

$$\frac{\bar{X}_n - \mu}{\sqrt{\sigma^2/n}} \xrightarrow{d} N(0, 1)$$

**定義 6.**  $n$  が大きいときの  $X_n$  の近似分布を**漸近分布**という.

注 8. 中心極限定理より

$$\begin{aligned} \sqrt{n}\bar{Z}_n &\overset{a}{\sim} N(0, 1) \\ \frac{\bar{X}_n - \mu}{\sqrt{\sigma^2/n}} &\overset{a}{\sim} N(0, 1) \end{aligned}$$

すなわち

$$\begin{aligned} \bar{Z}_n &\overset{a}{\sim} N\left(0, \frac{1}{n}\right) \\ \bar{X}_n &\overset{a}{\sim} N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right) \end{aligned}$$

ただし  $\overset{a}{\sim}$  は漸近分布を表す.

**例 2.** 指数乱数の標本平均の分布 (図 2).

### 3.4 正規乱数の生成 (p. 171)

$\{U_i\}$  を  $[0, 1]$  上の一様乱数の列とすると

$$\begin{aligned} E(U_i) &= \frac{1}{2} \\ \text{var}(U_i) &= \frac{1}{12} \end{aligned}$$

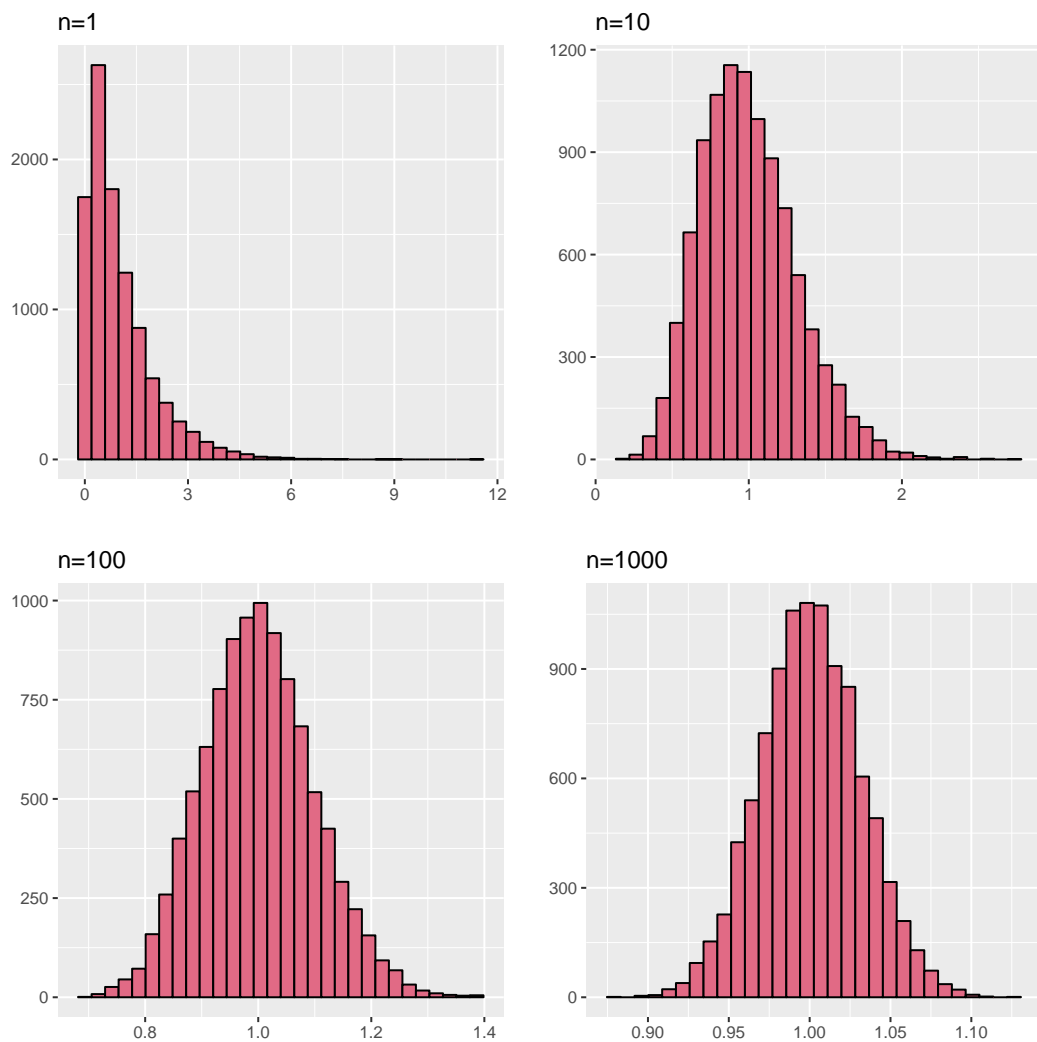


図 2 指数乱数の標本平均の分布

$X := U_1 + \dots + U_{12} - 6$  とすると

$$\begin{aligned} E(X) &= 0 \\ \text{var}(X) &= 1 \end{aligned}$$

中心極限定理より

$$X \stackrel{d}{\sim} N(0, 1)$$

これを利用して一様乱数から標準正規乱数が生成できる (図 3).

## 4 今日のキーワード

標本平均, 確率収束, 大数の法則, 分布収束, 中心極限定理, 漸近分布

## 5 次回までの準備

**提出** 宿題 4, 復習テスト 9-13

**復習** 教科書第 8 章, 復習テスト 13

**試験** (1) 教科書を読む (2) 用語の定義を覚える (3) 復習テストを自力で解く (4) 過去問に挑戦

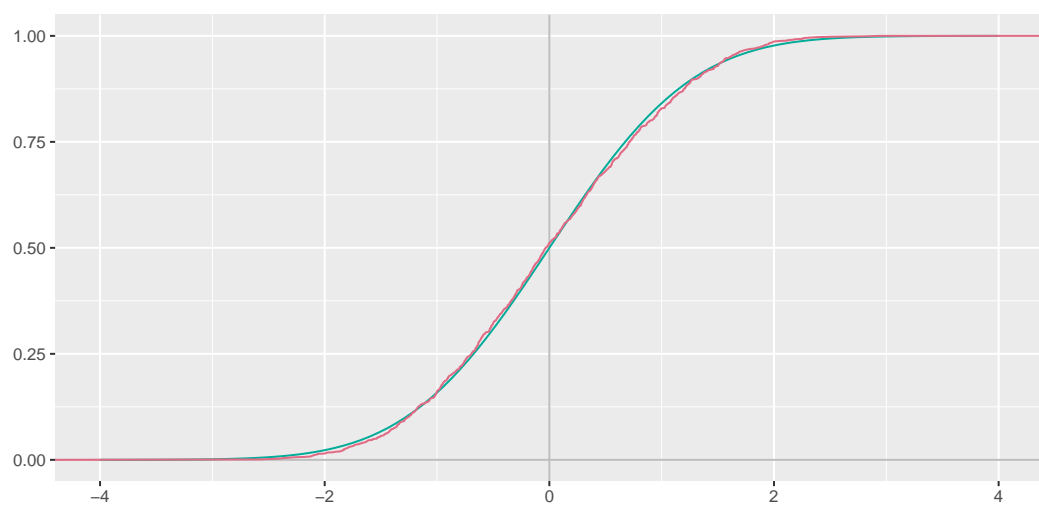


図3 1000 個の標準正規乱数の累積相対度数グラフと  $N(0,1)$  の cdf